

きなかった。内部腫瘍は T1 強調像で中等度、T2 強調像では高信号として描出された。超音波、CT 及び MRI では内部腫瘍の性状を正確に把握しづらかったが、脂肪組織に富むものではないかと推測し、卵巣類皮嚢胞腫と診断した。病理組織診断は Mature cystic teratoma であった。

11) ⁹⁹Tc-MDP 骨シンチグラフィにおける腫瘍への集積の検討

松月 由子・高橋 直也
西原真美子・木村 元政
小田野幾雄・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

Tc-99m-MDP に代表される骨シンチグラフィは、悪性腫瘍の骨転移検出に対する最も有効な手段である。その一方で、骨シンチにて骨外組織に集積を認めた症例の報告が多数ある。今回私達は、1985年から1991年の間に当科で施行された Tc-99m-MDP 骨シンチグラフィにて骨以外の腫瘍に集積を認めた10症例をもとに、その集積機序について検討し若干の文献的考察を行った。骨外集積の機序として、文献的には、組織の石灰化、虚血性壊死、腫瘍の vascularity 等があげられている。今回の症例中にも、それらが集積の原因であると思われるものがあつた。また、腫瘍径が大きいほど集積しやすい傾向があり、過去の報告と一致していた。骨外集積を示す疾患とその機序について知識を深めることは、骨シンチ読影上の誤診を減少させるとともに、集積した組織の状態を知る助けとなる。さらに、骨シンチの新たな価値を発見する可能性を高めることができる。

12) ステロイド剤が奏効したと思われる悪性胸腺腫の1例

吉村 宣彦・小田 純一
加村 毅・椎名 真
酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

悪性胸腺腫は遠隔転移が1~15%と比較的少なく、周囲への浸潤、胸膜播腫がみられる。また放射線感受性が比較的高く、治療法としては、手術の根治性を問わず手術+放射線療法が第一選択である。化学療法は遠隔転移を有する例、再発例を中心に行われる。

本症例は手術と放射線療法により完全寛解となった後、肝転移、頸部リンパ節、胸膜播腫が出現し化学療法が施行された。その後の頭蓋内硬膜転移の浮腫改善目的に使

用したステロイドにより、腫瘍の縮小がみられた。悪性胸腺腫のステロイド有効例は、今までに文献により報告されており、その中には手術、放射線療法、化学療法後の再発において完全寛解がみられたという例もある。本症例に関しては長期観察はなされていないが、少なくともステロイド投与による経過観察は有用であるといえる。ステロイド療法は悪性胸腺腫の治療法の一つとして考えられるべきであろう。

13) 先天性肋間動静脈瘻の1例

川崎 俊彦・古沢 哲哉 (長岡赤十字病院
放射線科)
清野 泰之
上村まさ代・脇屋 義彦 (同 内科)
富樫 賢一・佐藤 良智 (同 胸部外科)

21才、女性の先天性肋間動静脈瘻の1例を報告した。主訴は心雑音。3カ月検診にて心雑音を指摘され、精査後放置。今回も検診にて心雑音を指摘され、精査目的にて当院内科入院。既往歴・家族歴に特記すべき事なし。胸部背側第7肋間胸椎左縁に Levaime III/VI の連続性雑音を聴取する以外には異常所見は認めず。胸部単純X線で第9胸椎左縁に腫瘤影を認め、CTで第8・9胸椎の高さに脊柱管から左肋骨に沿う様に不均一に造影される腫瘤を認め、MRIで同腫瘤は無信号を呈した。血管造影で胸部大動脈より分岐し、半奇静脈・奇静脈系を介して上大静脈・右房へ流入する異常血管を確認。先天性肋間動静脈瘻と診断し、切離した。先天性肋間動静脈瘻について若干の文献的考察を加えて報告した。

14) 金属ステントの胆道系疾患における使用経験

横山 健一・道野慎太郎
藤川 隆夫・水谷 良行
楠田 順子・竹井 亮二
似鳥 俊明・是永 建雄
蜂屋 順一・古屋 儀郎 (杏林大学放射線科)

閉塞性黄疸の減量目的で PTCD あるいは ERBD 等の endoprosthesis がなされていたが、前者は入浴が不可能であり、後者はチューブの閉塞あるいは逸脱などの問題が生じていた。この様な問題を解消する目的で最近では Gianturco 型金属ステントを Biliary endoprosthesis として臨床応用する施設が増加している。

今回我々も、平成3年5月より8月まで、悪性胆道狭窄・閉塞5例(総胆管癌、肝門部リンパ節転移、胆嚢癌、